

2026.06.07.

「神の業が現れるために」

旧約 コヘレトの言葉 1 1 章 3～6 節

新約 ヨハネによる福音書 9 章 1～1 2 節

1. はじめに

私共は生きていく中で様々な出来事に出会います。嬉しいこともあれば、困り果ててしまう時もあります。そのような中で、理不尽と思える出来事に出会う時、私共は「なぜ、こんなことが起きるのか？」或いは「なぜ、自分はこんな目に遭わねばならないのか？」そのような思いを抱までしょう。しかし、そのような問いに簡単に答えることが出来るようなことはほとんどありません。また、説明できるようなものであったとしても、私共がそれで納得するということとは別のことです。あれが悪かったのか？それともあの時言った言葉が悪かったのか？色々と原因を考え、犯人捜しをしますけれど、そうそう原因が分かるものでもありませんし、犯人が見つかるものでもありません。大きく言えば世界の政治情勢が関係することもあるでしょうし、小さな事で言えば自分を取り巻く人間関係などの場合もあるでしょう。それぞれ様々な説明が可能ですし、実際、各々の立場立場によって、まことしやかな説明がされます。その説明にも様々な次元と言いますか、様々な切り口があります。例えば、自分が病気にかかった時、合理的な説明として医学的な説明がされます。多くの場合は、それで納得するしかないのですけれど、時には医学的な説明が付かない、原因が分からない場合があります。また、治療方法が現時点では無いような場合があります。そうしますと、どうして？なぜ？という問いが際限も無く湧いてくるのではないのでしょうか。なぜ他の人では無く私なのか？どうして治療方法は本当に無いのか？そもそも誤診では無いのか？これからどうやって生きていけば良いのか？等々、このような問いは、自分が努力してもどうにもならない事態に直面した時、誰の心にも思い浮かぶものなのではないのでしょうか。

2. 因果応報か？

今朝与えられている御言葉、ヨハネによる福音書 9 章 1 節からの出来事は、まさにそのような状況に生きる人間に対してのイエス様の言葉が記されています。生まれつき目の見えない人がいました。8 節には「**彼が物乞いであったのを前に見ていた人々**」とありますので、この人は道端に座り、物乞いをしていたのでしょう。2000 年前のユダヤに社会福祉なんてありませんから、このような障害を持った人は物乞いをして生きるしかありませんでした。イエス様の弟子たちがその人を見つけ、イエス様にこう尋ねました。「**ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯し**

たからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」(9:2)「ラビ」というのは、先生という意味です。この弟子たちの問いは、「生まれつき目が見えない」という事態を、本人か両親かいずれかが犯した罪に対しての神様の罰として理解していたということを示しています。このような理解はイエス様の弟子たちだけではなくて、当時の一般的な理解の仕方だったのでしょう。生まれつき目が見えないのであれば、本人の罪が原因であるはずがないのですけれど、本人が犯した罪に対しての神様の罰なのか、両親が犯した罪に対しての神様の罰なのか、どちらですか？そう弟子たちはイエス様に問うたわけです。これは、多くの宗教が教えてきたことでもあります。日本人もこのような理解の仕方を知っています。「因果応報」という考え方です。これは仏教における考え方ですが「全てのことには原因とそれによる結果というものがある。前世または過去の行いの善悪が原因となって、その報いとして現在の善悪の結果がもたらされる」という考え方です。現在の状況は、何らかの前世を含む過去に行ったことの報いであり、結果だと考えるわけです。しかし、この人が「生まれつき目が見えない」という状況は、そのように説明されても本人にも、親にもどうしようもないわけで、ただ「そういうことなのか」と諦めて受け入れていくしかありません。この「因果応報」という説明はただの説明であって、これを教えられて説明されても、生きる力も勇気も与えられるものではありません。せめて来世ではこのようにならないように良き業を為していこうということぐらいのことでしょう。人間の知恵では何とも説明できない出来事に対して、宗教がその役割を果たすということはいつの時代でも、世界中どこでも行われてきたことです。しかし、キリスト教は理不尽な現実をただ説明するだけのものではありません。ただ説明するだけなら、「このような不幸があなたの家に次々と起きるのは、家の玄関の横にある木の方角が悪い」と訳の分からない説明するような怪しげな宗教モドキと少しも変わりません。この手のものは、ちまたに溢れています。

3. 神の業が現れる為に

しかし、ここでイエス様は弟子たちが今まで聞いたことも、考えたこともないことを告げられました。3節「**本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。**」イエス様は明確に因果応報的な理解を退けられました。これは、単にそのような理解の仕方を退けられただけではありません。この因果応報的な理解の前提となる世界観を退けられたのです。イエス様は「この世界は、何か良く分からない因果応報といった法則によって支配されているのではない。天地を造られた神様が支配されているのだ。そして、その神様はこの「生まれつき目の見えない人」をも愛しておられる。だから、この人が「生まれつき目が見えない」のは、神様がこの人に対して特別なことされ、神様の御業を現そうとされているからだ。」と告げられたのです。そして、イエス様は実際にこの人の目を見えるようにされるという奇跡をなされたのです。6.7節「**こう言うってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになっ**

た。9:7 そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。」

この人が「生まれつき目が見えない」という現実、それさえも「神様の業」が、つまり神様の愛がこの人に出来事として現れる、そのために神様が与えられた現実だということです。ただの不幸な現実といったものではない。神様が生きて働き、私共の思いを超えた神様の愛が一人一人に注がれていることが明らかになる、そのための現実なのだと言われたのです。そして、実際にこの人の目が見えるようにされることによって、イエス様は神様の御業を現されました。

4. まーちゃんの話

私にとって、この聖書の箇所はある出来事と分かちがたく結び付いています。私というよりも、私共夫婦にとってと言った方が正確でしょう。この聖書の箇所を読む時、私共夫婦はあの出来事を外して読むことが出来ない、そういう出来事がありました。

最初の任地であった東舞鶴教会での出来事です。そこには、幼稚園が併設されていました。教会はちょうど宮崎中部教会と同じくらいの規模でした。妻の富士美さんが園長をし、私が幼稚園の理事長と牧師をするという形でした。その幼稚園にある時、お母さんがまーちゃんという女の子を連れて入園を希望しに来られました。まーちゃんには軽い知恵遅れがありました。色んな幼稚園を回ったけれども断られ、私共の幼稚園が最後の幼稚園でした。私共の幼稚園は受け入れることにしました。そして何ヶ月か過ぎた頃、園だよりでこのヨハネによる福音書9章のイエス様の言葉が載りました。富士美さんがこの御言葉の解説を短くしていました。そして、まーちゃんのお母さんがこのイエス様の御言葉に撃たれたのです。文字通り頭を打たれ、心が貫かれたんです。そして、私のところに話しに来られて「こんな世界があるんですね。初めて知りました。私はまーちゃんがこうなったのは、私達夫婦のせいだと思っていました。そして、何とかまーちゃんの状態が良くなるように、そればかり願っていました。自分はある宗教に親の代から入っていて、そこでも先祖を供養して良くなるようお願いするようにと勧められました。そのようにもしました。でも、何も変わりませんでした。初めての子で、これからどうすればいいのか、目の前が真っ暗でした。しかし、先日の園だよりのイエス様の言葉を初めて知って、目の前に光がぱっと差し込んできました。まーちゃんの上にも、神様の御業が現れるんですね。まーちゃんは神様の罰が当たったわけではないんですね。」私は「勿論です。まーちゃんも神様に愛されていますから、まーちゃんにも神様のご計画がありますよ。それがどのようなものなのか、私には分かりません。でも、まーちゃんだけに神様が特別に用意された何かがあるのだと私は信じます。」と答えました。そして、それから幼稚園のお母さんの為の聖書を学ぶ会、マリア会とっておりますが、これに出られるようになりました。「私は別の宗教をやっているんですが、私も出ても良いのでしょうか。」と言われ、「勿論、誰

が出て良いのです。大歓迎です。」と言いますと、それからずっと、何年も何年もその集会に來られました。二人の妹さんも幼稚園に入られました。その内に教会学校にも子どもを連れて來られるようになり、大人の礼拝にも出られるようになり、そして 10 年くらいしてこの方は洗礼を受けられました。今は、その教会で長老をされています。まーちゃんは高校を卒業して、地元のスーパーマーケットのレジの仕事に就きました。まーちゃんは、いわゆる健常者になったわけではありません。しかし、彼女は自分が出来ることを真面目に、サボることもなく、きちんとやる人に成長しました。お母さんはまーちゃんがちゃんと生きていけるかどうか心配で仕方がありませんでしたけれど、まーちゃんの明日を神様の恵みの御手にお委ねることが出来ました。そして、まーちゃんが与えられたことを心から感謝する人となりました。

5. 目が見える

さて、この時イエス様はこの人の目が見えるようにされたわけですが、このような奇跡がいつでも起きるということではないでしょう。しかし、私はまーちゃんとそのお母さんとの出会いを通して、目が開かれる、目が見えるようになるということは、この世界を神様が造られた世界として見えるようになる、そして自分も家族も神様の愛の御手の中で造られ、生かされているということを知るようになる。そういうことなのではないかと知らされました。

私共は自分が置かれている状況、あるいは自分の目の前に立ち塞がっている現実に対して、それを自分の手ではどうすることもできない時、理不尽な運命を恨んだり、将来に対して悲観したり、諦めたりする、他人をうらやんだりするしかない。そういう世界に生きていました。しかし、イエス様に出会って変えられたわけです。天地を造られた神様には出来ないことは何一つないし、その神様が私の人生に介入してこられ、出来事を起こし、道を開いてくださった。そして、その道は自分の願いやこうなれば良いのにという勝手な望みを満たす道ではなくて、私共の思いを超えた神様の永遠のご計画を実現する道、もっとはっきり言えば私共を天の御国へと導く道です。その道が必ず開いていく。そのことを信じる事が出来るようにしていただいたわけです。

こう言っても良いでしょう。前もダメ、横もダメ、後ろにも下がれない。もう八方塞がりだとしても、私共には天がある。天はいつも開いています。私共を愛し、「我が子よわが許に來たれ」と私共を招いてくださっているお方がいる天です。この方に向かって「父よ」と呼びかけ、祈ることが許されている。そして、このお方が私共の思いを超えたあり方で道を開いてくださいます。何とありがたいことでしょうか。

6. 私は知らない。しかし、神様は知っておられる。

先ほど旧約聖書のコヘレトの言葉を読みました。11:5.6 に「11:5 妊婦の胎内で霊や骨組がどの様

になるのかも分からないのに、すべてのことを成し遂げられる神の業が分かるわけではない。 11:6 朝、種を蒔け、夜にも手を休めるな。実を結ぶのはあれかこれか／それとも両方なのか、分からないのだから。」と告げられています。私共は自分がどのようにお母さんのお腹の中で形作られていくのか、昔の人に比べれば現代の私共は超音波診断でお腹の赤ちゃんを見えるようになりましたし、DNAの解析も進んできましたけれども、全てを知るようになったわけではありません。神様の御業を人間は知り尽くすことは出来ません。だからといって、落胆することも、諦めることもありません。神様が知っておられるからです。その神様は、御自身の独り子イエス様を十字架にお架けになるほどに、私共を愛してくださっています。この愛は、私共がどんな境遇になろうとも、微動だにしません。私共は、自分が漠然と思っていた将来の計画が崩れると、戸惑い、どうすれば良いのか分からずに動揺します。しかし、神様は今朝、「大丈夫。神様の御業が現れる。」と告げます。この神様の約束を信頼するところに、私共の信仰は立ちます。私共の見通しは、いつも崩れていきます。私どもが立てる見通しというものは、いつも自分にとって都合の良いようになるようになっていきます。ですから、見通しが崩れると動揺するわけです。それは仕方がないことです。しかし、そこにおいてこそ立ち戻りましょう。神様がおられる。私共を愛され、全能の御力をお持ちの方がおられる。このお方が、このまま放っておかれるはずがない。これはどんな時でも本当のことです。

7. 目を開かれた者が為すべき事① 証言する

さて、このイエス様によって目が見えるようにされた人を見た人々はどうしたでしょうか？ 8 節以下にこうあります。「9:8 近所の人々や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。 9:9 「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。 9:10 そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、 9:11 彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」 9:12 人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。」まず、目が見えるようになった人が、自分の知っている物乞いをしていた生まれつき目の見なかった人なのか、疑う人もいれば、その人だという人もおりました。生まれつき目の見えない人が見えるようになるという、全くあり得ないことが起きたわけですから、これを受け入れることが出来ない人がいるのも当然です。しかし、本人が「わたしがそうだ」と言うものですから、「どうして目が開かれたのか」と問います。彼は、イエス様が土をこねて目に塗り、シロアムの池で洗いなさいというのでそのようにしたら目が見えるようになったと、ありのままに告げました。ここに、この人の解釈は入っていません。それが大切です。自分の身に起きたことをそのまま告げる。それが証言です。キリストの教会はこの証言を大切にしてきました。

私共に求められているのは、証言です。解釈ではありません。この証言を聞けば、イエス様という方がただ者ではないということが分かります。何者であるのかはまだ分かりません。そして、人々はイエス様を探そうとします。つまり、イエス様を求めるわけです。それで良いです。私共が為すべきことはそこまでです。

8. 目を開かれた者が為すべき事② 証言する者の群れ

先週、月・火と「日本伝道フォーラム」に出席するために、東京神学大学に行ってきました。台風が来ていて、帰って来るのに難儀することは分かっておりましたが、ワークショップで発題することになっておりましたので行ってきました。私がお話したことの一つは「証言する。嘘をつかない。」ということです。復活されたイエス様は弟子たちに「1:8 あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」（使徒言行録 1:8）と告げられました。「わたしの証人となる」、つまり証言する者となると言われました。そして、弟子たちは実際、イエス様が為されたこと、お語りになったことを証言していきました。イエス様は弟子たちに、私について説明しなさいと言われたわけではありません。証言です。その証言がまとめられたのが福音書です。

私共もイエス様の救いに与った時、あるいはその後の信仰の歩みにおいて、神様の御業に触れてこられたことでしょう。その証言に溢れている所、それがキリストの教会です。教会には 2000 年の歴史があります。それは、2000 年分の証しがあるということです。それが教会の財産です。私共の教会は国宝を持っているわけではありません。しかし、宝を持っています。それはイエス様に救われ、イエス様と共に生きる者とされた多くの証人達の証しです。私共もその証人の一人として立たされています。ここから始まる新しい一週間、主の証人として、言葉と行いと存在をもって、神様の救いの恵みを証しする者として歩んでまいりたいと思います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

天地を造られ、全てを御支配されたもう、主イエス・キリストの父なる神様。あなた様の恵みの御手の中で一日一日を生かされておりますことを、心から感謝いたします。私共の思った通りにはいかないこともありますけれど、どんな時でもあなた様の恵みの御手は私共を捕らえて放すことはありません。そのことを信頼して、為すべきことを為せるように、精一杯、今週もあなた様と共に、あなた様の御前を歩いて行くことが出来ますように。あなた様の恵みを証言する者として、それぞれ遣わされている場において、あなた様が用いてくださいますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン